

雲藩刀工 高橋聳司長信

～作刀期間における刀剣等と銘文の調査から～

長 尾 充 恒

岐阜県

はじめに

高橋長信に関して、銘文の推移から、高橋長信の活躍の事跡や彼を取り巻く身辺的状况、社会的状况を考察する。

1. 高橋聳司長信の生涯

(1) 出雲藩工の高橋冬廣の門人・養子

長信は文化14年（1817）9月18日出雲郡三分市村（現在の簸川郡斐川町大字三分市）に農民・瀬崎平助、キヨの善造（次男）として生まれる。文政12年（1829）13歳の時に出雲松江藩工高橋冬廣に入門。入門の経緯について伝説はあるが不明である。のちに六代目冬廣の養子となる。

天保9年（1838）4月15日、師匠の五代目冬廣が亡くなると高橋家は六代目冬廣（六代も養子であり、この時37歳）が継ぎ、一方、22歳になった長信は江戸に出て加藤長運齋綱俊の門人となる。養子になったことや、高い費用を負担して江戸に修業に出されたことなどを考えると非凡で優れていたことが伺える。後述するが銘字も達筆であり、基礎的教養も十分習得していたと推測できる。なお江戸での修業費用に関して、天保9年に雲州

藩で有能な人材に対して藩費修業制度が創設されていることから、それを活用した可能性も指摘されている。江戸での師・加藤長雲齋綱俊は当時の江戸での人気刀工の一人であった。江戸での師を綱俊にした理由とか、綱俊の元での修業に関して資料はない。

(2) 江戸での活躍

長信には「天保十二年二月日」と銘を切ったこの年には師匠の綱俊のもとから独立したと考えられる。天保9年に入門して2年半ほどの修業期間であり、25歳になっていた。高橋冬廣家の養子にも関わらず、長信を名乗った理由については伝わっていない。名乗りは、いくつか変遷が見られるので、それについては銘文の考察において触れたいが、天保14年、27歳になると「冬廣長信」「長信齋冬廣」「高橋理兵衛冬廣」と名乗りを変えるから、この時点で七代目冬廣を継いだことが推測されている。

その後も江戸で作刀を続けるが、弘化4年正月（31歳）から嘉永4年八月（35歳）までは銘文から、一時的に松江に戻ったと判断されている。

再度、江戸に出て活躍し、安政2年（39歳）には藩に抱えられて細工方に属し、二十俵三人扶持を与えられる。安政三年

(40歳)には日本橋魚市場から成田山新勝寺への奉納大絵馬に据える剣の注文も受けている。

元治元年(48歳)に長州征伐に備えるために、長信が松江に帰り、以降は松江で鍛刀する。慶応元年(49歳)には新番士として士分に取り立てられている。現存する作刀は明治四年八月日(55歳)までだが、明治12年5月20日に63歳で死去したことが判明している。

2. 長信の銘文

刀鍛冶の銘は、刀の柄に納まる部分(茎(中心))に鑿で切っていくものであるが、時代が下がると銘文には鍛冶名だけでなく、作刀年月日、注文主氏名、刀工の居住地、試し斬りの結果などが刻されることになる。

長信の種々の銘文からの調査は、安部吉弘氏はじめ何人かの先人によって実施されているが、今回、現存する長信の銘文を時系列的(年紀のある作刀中心に)に洗い出して、改めて考察してみたい。

(1) 刀銘・長信について

長信は、前述したように松江藩工として由緒のある高橋冬廣家の七代目を継ぐが、一時的に冬廣銘を名乗るものの、長信銘が大半である。名乗りの推移は次の通りである。

天保12年(25歳)～天保14年(27歳) ……長信
 天保14年(27歳) ……冬廣
 長信齋冬廣、冬廣長信、長信
 天保15年(28歳)～嘉永2年(33歳) ……長信

嘉永3年(34歳) ……長信
 青龍齋冬廣作長信極之(槍であり、五代冬廣の作に長信が極めたと追銘)

嘉永4年(35歳)～嘉永7年(38歳) ……長信齋冬廣

 冬廣、冬廣長信、長信
 安政2年(39歳)～安政4年(41歳)

……長信
 長信齋冬廣、(雲州藩、雲藩が多くなる、藤原も多くなる)

安政5年(42歳)～文久4年(48歳) ……長信

元治元年(49歳)～慶応4年(52歳) ……長信
 (雲陽士、運藩士を冠することも多い)

明治2年(53歳)～明治3年(54歳) ……長信(松江藩、イツモ、松江藩士を冠する)

明治4年(55歳) ……長信(松江藩住)

長信銘の由来については今のところ不明である。冬廣家の先祖にも関連する名乗りは見られない。養家の名乗りを襲名しなくても許されるような事情(例えば藩の上位者からの賜銘など)があったものと考えられる。

天保14年(27歳)の銘文に「長信齋冬廣」(これは42歳くらいまで時々使用している)があるが、この長信齋は師の長運齋を意識していると考えられる。

元治元年には長信に随行して松江に戻る。なお長信は、養家に伝わる「冬廣」銘を天保14年(27歳)の時と、嘉永3年(34歳)～嘉永6年(37歳)の時に多く使用している。これについて安部吉弘氏は、天保14年、27歳になると「冬廣長信」「長信齋冬廣」「高橋理兵衛冬廣」と名乗り

を変えるから、この時点で七代目冬廣を継いだと推測されている。

それから、嘉永3年(34歳)～嘉永6年(37歳)の時は、弘化4年正月(31歳)～嘉永4年8月(35歳)まで松江に一時帰国したことに関連していると判断される。なお一時帰国の理由について安部吉弘氏は養父母の病気・死去(六代冬廣は嘉永2年5月7日に48歳で逝去、六代の後妻は嘉永3年11月5日、49歳で逝去)、自身の結婚(長男が嘉永元年2月28日生まれである。前年の弘化4年には帰国して、雑賀町の森豊次の妹と結婚している)などが要因ではないかと推測されている。

以降は40歳時点で「冬廣」を銘した作品を見るが、他には現存する作品は無く、基本的に名乗っていないと考えられる。現時点では史料がなく不明である。

(2) 出雲松江藩と銘文

長信は天保12年25歳で独立した時に「雲州住」(江戸での鍛刀であり「於東都」が付くこともある)と切っているが、「雲州住」ではなく「雲州」だけの銘は天保15年(弘化元年)28歳の時に存在し、以降、時々使われている。養家の高橋冬廣家は、代々松江藩の御用を勤めており、天保14年27歳になって「冬廣」と名乗った時に、藩工の身分も継いだと思われる。「雲藩冬廣」と切るのは嘉永5年36歳の時である。安政3年40歳頃から「雲州藩」も含めて「藩」の字が多くなる。安部吉弘氏の研究によると、『安政二年乙卯改分雲州藩切米帳』に「米二十俵三人扶持刀鍛冶師高橋理兵衛」とあるから、「藩」と名乗る時点(嘉永5年)で藩の細工方

に属していたことが推測される。

また『明治三年庚午雲州御給帳』には準士族役組として「刀劍師 高橋聳司」とあり、職人の身分から「新番士」の士分(本人一代限り士分)に取立られたことが確認できるとのことであり、慶應元年8月(49歳)から「雲陽士」または「雲藩士」の銘が切り始まるのは、この身分の上昇を反映していると考えられる。藩の記録には長信の刀を贈答に用いた記録が残っている。明治3年(54歳)からの「松江藩士」は、維新後の名称(明治2年松平定安が松江藩知事に命じられる)を反映したものと考えられる(明治4年に廃藩置県となり松江県となる)。

(3) 江戸における鍛刀地

長信は銘文に江戸における鍛刀地を切っていることも多い。これについては安部吉弘氏が詳しく研究され、当時の切り絵図から場所を特定されている。氏の論は次の通りである。

- ① 江戸へ出た当初は、雲州藩下邸が麻布今井村にあり、綱俊の飯倉片町の上杉藩中邸の鍛冶場に近いので、この下邸に住んで通い弟子として修業したと推測される。
- ② 天保13年9月紀(26歳)の刀に「於東都赤坂」の銘がある。また無年紀だが天保末年頃(27～28歳)の刀に「於東都赤坂御門外」がある。ここには雲州藩中邸があり、そこで打った可能性もある(藩主の弟で、長信と合作した作刀が残っている松平駒次郎貴道との関連も考えられる)。

③ 弘化の末頃(31~32歳)に「麴町三軒屋」へ移る。その後まもなく一度、松江に帰っている。再度上京した時には麴町に住んだと考えられる。嘉永6年(37歳)に「星山辺」(星山は日枝神社のある台地)、「於江都麴街三軒家」「米花街」「糶街」「元山王麓」(明暦3年に移転する前の日枝神社の場所)などと切っている。これに基づき、安部吉弘氏は当時の江戸切絵図に「高橋利兵エ」の住まいを見つけ、この場所と推測している。

(4) 「聾」、 「聾司」 の銘

長信は安政元年(38歳)12月紀の短刀に初めて『聾長信』の銘を切る(「刀剣美術」287号 昭和55年 深江泰正氏による「珍刀珍品報告」に初出、安部吉弘氏の著作にも転載)。しかし、この後は「聾」の字はしばらく現れずに元治元年(48歳)から慶応4年(52歳)の作刀に「聾司」と切ったものが見られる。その後は見ない。

この耳が聞こえなくなった原因については不明であるが、次のような説がある。

① 松江藩柔道師範石原佐傳次藤原中従という剛の者が、長信の刀が本当に良く切れて、しかも折れないかを荒試し(堅物試しとも言い、兜を切ったり、角を切ったり、刀を横から叩いたりして試す)を行う。長信は、その壮絶な試しに耐える刀の製作に頭を悩まし、また不眠不休であたった為に難聴となる。(ストレス性難聴又は音響性難聴の原因か)

② 当時、江戸で多かった性病(梅毒)

にかかり、その影響で聞こえなくなったのではないか(明治12年に64歳で逝去するが、死因については、藩主の菩提寺・月照寺の裏山を買い込み、そこに狐を数多く殺した祟りで、発狂して死亡との伝説もある。伝説の内容はともかくとして脳の異常は性病が進んだ証左とも考えられる)。

次男鐵之助と四男亦一郎も梅毒患者(先天性梅毒新生児か)、従って長信も同様あったと想像。次男鐵之助(安政2年12月出生)、長信が当時39才、以前には梅毒感染を罹って神経系梅毒の内に内耳梅毒を起こしたか。

38歳時の一振りだけに「聾」の銘があり、それから48歳までの間に「聾」の添え銘がないのをどう判断するかは研究課題である。38歳の「聾」銘が後銘(あとから本人あるは別人が入れた)の可能性もあるし、この間、一時的に耳が治った可能性もある。難聴を引き起こす病気の特性などからも判断することも考えたい。

48歳から52歳に「聾司」銘が見られ、それが53歳からの銘にない点(知られていないものがある可能性もある)なども、引き続き研究していきたい。

(5) 切れ味の試し銘

長信が当時、人気を博した理由は、切れ味の良さにあると考えられる。銘文にも、試し切りをした結果を切り付けている。刀剣は実用=斬ることが大切であり、その利鈍について、当時の武士は高い関心を持っていた。この利鈍の見極めに関して江戸時代後期には、幕府御試し御用の山田浅右衛門家(山田浅右衛門は本来

は牢役人の業務の斬首も請け負う)が権威を持っていた。山田家の試し切りの技を学ぶ為に、各藩からも、多くの門人が入門していた。文政十三年に『古今鍛冶備考』を門人とともに発刊し、そこにおいて各刀工の切れ味を、最上大業物、大業物、良業物、業物とランクづけしている。

当時の新作刀においても、山田浅右衛門の試し銘があると、切れ味が保証されているとして、人気が出たことは言うまでもない。高橋長信も、次のように初期には山田家(五三郎吉年、源蔵吉豊、吉次吉豊)の試し銘を入れている。ちなみに「千住」は試刀を行った場所で、「太々」(胴の脇の下辺り)「両車」(腰骨の辺り)は斬る人体の部位で堅い所である。「ニツ胴」、「三ツ胴」は罪人の胴を2つ重ねる、3つ重なるという意味である。土壇とは文字通り、土を盛った死体を据える場所である。

天保13年(26歳)

- (1) 於千住太々土壇払切人山田五三郎
- (2) 於千住ニツ胴土壇払切人山田五三郎

天保14年(27歳)

- (1) 於千住太々土壇払山田五三郎
両車切断伊賀四郎左衛門 真向割
谷源次

天保15年(28歳)

- (1) 於千住三ツ胴土壇払山田五三郎試之

天保16年(29歳)

- (1) 於千住太々両車土壇払山田五三郎試之

また前述したが、松江藩柔道師

範石原佐傳次とその門下による荒試しの様子が見られる切銘もある。冑を試したことがわかる。

嘉永2年(33歳)

- (1) 石原藤中従以此刀試例千冑門人野間才蔵源中育帶之

嘉永3年(34歳)

- (1) 雲藩柔道師石原中従数切堅甲拾如削瓜門人湯本信之 亦試之
- (2) 雲藩柔道師範石原中従甲切土壇払自試甲及数刀 小倉六蔵源重正
再度、上京してからも次のように山田家の切断銘が存在する。

安政元年(38歳)

- (1) 於千住太々土壇払切手山田源蔵

安政2年(39歳)

- (1) 於千住太々土壇払切手山田源蔵

安政6年(43歳)

- (1) 於武州千住太々土壇払山田吉次試之
- (2) 於武州千住 山田吉次試之 太々土壇払

また長信は、山田浅右衛門吉利(吉年)とも交わりを結び、ともに插花の道にいそしむと伝わる。以下は伝聞だが、長信自身も自ら3度厚い鐵板に切りつけ試さない内は決して刀銘を切らなかったという話が残っている。

3. 長信の時系列別の作刀数

データで見ると、作刀数は安政6年(43歳)の頃から多くなり、文久2年(46歳)、文久3年(47歳)がピークとなり、明治3年(54歳)まで、それなりに多いことが理解できる。

逆に少ないのは松江に一時帰国した弘化4年(31歳)と、再度松江から上京した嘉永4年(35歳)の時である。旅の期間に作刀できないのは自明のことである。

次に作刀数が多くなった背景を長信個人の事情と世の中の情勢から考察したい。

まず長信個人の事情であるが、安政2年(39歳)には藩に抱えられて細工方に属し、20俵3人扶持を与えられる。安政3年(40歳)には日本橋魚市場から成田山新勝寺への奉納大絵馬に据える剣の注文も受けており、急激に人気が高まり需要が多くなったのではなかろうか。前述したように山田家の試し銘も43歳までが多い。また元治元年(長信48歳時)には雲州藩を挙げて長州征伐の準備にあたっている。以降、戊辰戦争に従軍する士のために需要が続くが、明治4年(1871)に脱刀令(脱刀勝手たるべし)が出て、長信の作刀は終わったと考えられる。

謝意

伊藤三平氏には論文内容にアドバイスを頂きました。その他、下記の参考文献にお世話になりました。感謝しております。

参考

- 雲藩刀工高橋聾司長信の研究 安部吉弘
昭和63年11月
新刀古刀大鑑 下巻・新刀之部 川口陟
昭和47年2月
鑑刀日々 続二 本間順治
昭和59年8月
永田町絵図 高梨三雄誌
嘉永二巳酉秋
刀剣美術 第287号(公財)日本美術刀剣保存協会

昭和55年12月